

私は幼少期から、納得しないと行動できない子どもだった。大縄跳びの順番を待たず、同じ時間にみんなでお昼寝なんてもってのほか。両親はよく「あんたピッピみたいな子やな」と言った。公立の子ども園が私に合わないと感じた両親は、新たな居場所として、一日中森の中で保育を行う「森のようちえん」を見つけ、通わせてくれた。今日は何をする？ お昼はいつ食べる？ そんな全ての決めごとは、丸太に座って納得するまで子ども達で話し合っただけだった。自由の相互承認と民主主義とが担保された「森のようちえん」の空間は、私にぴったりだった。

中学に進学した際、「中学生らしさ」を過度に求める校則と、それをめぐる生徒と先生の口論に疑問を持つようになった。「森のようちえん」では誰もが納得するまでルールを話し合ったからだ。対立ではなく、対話によって学校をより良くする方法はないだろうか。生徒会長として「対話的な校則見直し」の活動を進め、最終的に多くの校則を、全校生徒と先生方との対話と納得によって変えることができた。また、気候変動対策への危機感から署名を集め請願書を提出し、滋賀県議会で条例を変えた経験もある。「納得しないと行動しない」ことを、「納得のために行動する」ことに昇華できた経験だ。

「森のようちえん」が発祥した北欧の教育と社会を自分の目を見て、その本質を探究したい。そんな思いから、高校2年の冬に政府の奨学金を利用し、北欧3国へ3週間ほど渡航した。約20機関ほどを独自に訪問する中、デンマークの田舎にある森のようちえんを研究フィールドとして訪れた。子どもたちと森へ入った時、夜の長い冬の北欧の薄い光が、何かに眩しく反射した。子どものリュックに揺れる「ピッピ」の小さなキーホルダーだった。思わず写真を撮らせてもらい、すぐに両親に送った。「いた。ここにもピッピ!」。時代も国も違う森の中、あの日の自分のように、ピッピを心の片隅に、走り回る子どもがいることを、とても嬉しく感じた。

私にとってピッピとは、「自分の考えを持ち、それを行動にする優しさと勇気」の象徴だから。今ではボロボロの絵本に、これまで何度も支えられた。理不尽と偏見がいまだに横行する世界。ウクライナやパレスチナでの対立、教育格差や差別と排外主義といった現状を乗り越えるには、間違いなくピッピが象徴するような「優しさと勇気」が必要だ。

長くつ下のピッピが今いたならば……。理不尽や偏見には一緒にNOを突きつけ、理想の自由で平等な社会のため共に対話してくれるだろう。しかし、現実の仕事は私たちの手にある。大きすぎる世界の問題の本質は、ピッピの物語のように、私が起こした幾つかの行動のように、日常の端々に潜んでいる。だから、小さな日々の違和感を見逃すことなく、対立ではなく対話によって解決していく姿勢がとても大切だ。

ピッピがたった一人、船からスウェーデンに降りたように、列車でデンマーク・スウェーデンの国境を抜け、私も決意を新たにしたい。優しさと勇気を胸に、未来をつくる一人でありたい。